



TOSHIYUKI HONDA DREAM & MODERN

SIDE-1 1. DREAM COMES TRUE (T. Honda) 5'35"
2. ODE TO SIDDHARTHA (C. Corea) 9'52"

Toshiyuki Honda(S, SS) Chick Corea(P) Miroslav Vitous(B) Roy Haynes(DS)

SIDE-2 1. MODERN (T. Honda) 6'40"
2. EVENING GLORY (GOING HOME) (T. Honda) 6'02"

Toshiyuki Honda(S, FL, P, KEY, PERC, W.WIND) Ryojiro Furusawa(DS, VOICE)
Tsugutoshi Gotoh(B) Akira Wada(G) Keiji Toriyama(SYN. PROGRAM)

制作にあたって

日頃は第一家電をご愛顧頂きまして誠にありがとうございます。DAMでは聴いて楽しく、又オーディオ・チェックにも最適なソフトの開発をと、努力をかさねてまいりました。今回は本多俊之氏の2つの世界を、SIDE1には、'84年スイングジャーナル・ジャズ・ディスク大賞制作企画賞を受賞した名盤「ドリーム」より2曲をピックアップしました。そしてSIDE2は、DAMとしては初めてフュージョン(ニューウェーブ)を、市販盤とはまったく別なDAMオリジナル・トラックダウンで仕上げた、音楽的にも録音内容も対症的な2枚をカップリングしました。

メインストリーム・ジャズとフュージョンという二面性を持ったアルバムの主役は、現在日本のジャズ・ミュージシャンの中で、そのはば広い音楽活動と作曲家・アレンジャーとして活躍されている本多俊之氏です。

本多俊之氏はパーニング・ウェーブで高い評価を得、その後ジョージ大塚セクステットそして浅川マキさんとのセッションや、ジャズの本場アメリカから一流ジャズメンを迎えておこなわれる、ライブ・アンダー・ザ・スカイにも出演し、ジャズファンにも絶

賛をあげました。このようにジャンルやスタイルを超えて音楽活動で実力を発揮している伸びがかりのミュージシャンです。

当社が昨年企画しました第6回春一番ジョイフルコンサート「北原理絵ジャズコンサート」にゲストとして登場し、パワフルな演奏を楽しませてくれた事は記憶に新しい事です。

「ドリーム」は本多俊之氏が以前からアイドルとしてあこがれていた名ピアニスト、チック・コリアとの夢のレコーディングが実現したという事で、本多氏が自身のうれしい気持をそのまま作曲した「ドリーム・カム・トゥルー」そして本多氏の熱い気持に答えて、チック・コリアがこのアルバムのために作曲した「オド・トゥ・シグータ」を提供しています。

2曲ともデジタル独特の透明度の高いシャープな録音ですが、名ベーシスト、ミロスラフ・ビトウスの厚みのあるベース、ロイ・ヘインズとは思えない量感のあるバスドラと、中低域の量も十分に入ったチェックにピッタリな内容で、特に「オド・トゥ・シグータ」はピアノの立上りやシンバルのきれこみ、なによりも緊張感十分な表現力の凄さに圧倒されるほどの熟演です。

デジタルマスターより何度もカッティングをしヒヤリングをくりかえした結果、雰囲気と透明度と熱気をそこなう事なく再現して

くれる方法として、イコライジングやリミッターを使用せず、フラットでカッティングしました。

「モダン」は本多俊之氏との打合せの結果、「オーディオ・チェック・レコードにするなら「モダン」はチェック用に再トラックダウンを」との相互の希望により、市販の「モダン」の録音担当ミキサーの坂元達也氏が76cm/24チャンネルより12時間かけてメインテマである「モダン」と「イヴニング・グローリー」の2曲を76cm/2チャンネル・1/2インチにトラックダウンしました。市販盤は76cm/24チャンネルにイフェクターを駆使しデジタルマスターリングをしています。DAMオリジナル・トラックダウンは76cm/2チャンネル・1/2インチでトラックダウンしましたので、中低域の量感が抜群なと、各楽器の厚みとエネルギー感には凄まじいほどパワフルで、DAMオリジナル・バージョンとしてお楽しみいただければと思います。

まったく異なった本多俊之氏の2つの世界を末長く愛聴盤としてご使用いただければ幸いです。

最後に東芝EMI(株)とスタッフの方々に多大な御協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

プロデュースにあたって

'83年8月8日、夜、やや緊張しつつ溜池にある東芝EMIの第3スタジオに入って行く。僕の8枚目のアルバム「ドリーム」のレコーディング打ち合せのためである。この日はちょうど自分のバンド「ニュー・バーニング・ウェーブ」で出演したニューポート・ジャズ・フェスティバル・イン・斑尾からのもどり日。そのため、かけこみでのミーティングとなったが、その疲れも感じていられぬ程の強力なサポート・メンバーとの対面が待っていた。

「チック・コリア・トリオ」……僕がまだジャズの世界に入り込む以前の事、あのカモメのアルバム（「リターン・トゥ・フォーエバー」）を聴いて初めてこの世界に目覚め、ソプラノ・サクソスを買いジャズを始めることになって以来、チックはずうっと僕にとってのアイドルだったわけである。その彼が現実に今、しかもミロスラフ・ビトウス（元ウェザー・リポートのベーシスト）、ロイ・ヘインズ（あのチャーリー・パーカーらとも活動していた）という強力なメンバーを率いてこの僕のアルバムに参加することになり、しかも、さらに感激したことには、わざわざこのレコーディングのためにチックから2曲のオリジナル（「コー・モーション」、「オド・トゥ・シゲータ」）をプレゼントしてくれると言うのである。これは僕にとっても、まさに「ドリーム（夢）」実現となったわけである。

レコーディングは翌9日と翌々10日の2日間、同じ東芝EMIの第3スタジオで行われ、ほとんどがテイク1〜2。チックの「コー・モーション」のみが2日間に渡ってテイク4まで行ったが、結局最終的に残ったテイクは1つ目。こういったふうに本当にインプロビゼーションを全面に押し出した瞬間的なスリルを追求したアルバムとなっており、まさにジャズの本領を発揮しているとも言える。いわゆるジャズという言葉が持つイメージ「ドロドロとした暗さ」の全くない（というよりも僕自身がそういったジャズができない世代）明るいジャズとなっている。これはチック自身、年齢のわりには明るいという音楽の体質も影響しているとも言える様である。すなわち「現在は明るいジャズの時代」であることを示した、かつアバンギャルドなアルバムとして聴いてもらえたら幸である。

一方、この「ドリーム」が発表された同年の'84年4月、早くもニュー・アルバム「モダン」のレコーディングに入る。今度は前作「ドリーム」とは違って変わったニュー・ウェーブ・サウンド、メンバーも古澤良治郎(ds)、後藤次利(b)、和田アキラ(g)といった共にジャズ、ロック、フュージョン界のトップ・ミュージシャン達による異色の組み合わせ。

初めは全部一人で機械を使って録ろうかとも思ったのだが、チックとのレコーディングが終わってからずうっと悩みつづけ、そんなこんな考えているうちに、ふっと浮んだのが古澤さん。その古澤

さんにまず一人でスタジオに来てもらい、パターンを作ってもらって録音。次いで後藤さんに来てもらったのオーバー・ダビング、とにかく彼には一杯入れてもらい、テープの回転を半分にしたりと、ギターみたいな音にしてみました。その分ギターのアキラちゃんの入るスペースが少なくなって、本当に悪いと思ってます。そして僕がサクソスとシンセと生ピアノ、それにフルートとやっ作曲らしい作曲は1曲だけ(A-2)。あとは決め無しで行ったら行きっぱなし。要するにムチャクチャにやりたかったし、実際に期待してた以上のものでできあがったわけである。

正直言うともっともっととっちらかりたい。ジャズとかフュージョンとかロックとか、そういったものにこだわらずに。それで、とっちらかって本当にやりたいことは何だって言われるかもしれないけど、とにかく今はいろんなことをやりたいわけである。固まるのはまだ先でいいというか、理論的に辻褄を合せようとも思わない。

そして今度のアルバム「サキソフォンミュージック」。これから出すアルバムは全部このタイトルで行こうとも考えている。自分の本来の楽器「サキソフォン」の追求というか、今回はその第1作目として（しかもリーダー作としては記念すべき10作目）ドラムスに青山純さんを迎えての録音。曲によってトランペットの近藤等則さんがゲストが入ったり、弦楽四重奏団が入ったりもしており、青山さんのソリの強力なビートをバックにメロディはどこかつかつかしいジャズといった雰囲気曲や、どこか日本的、あるいはロシア的、近未来的というふうにも思いつくままのサキソフォンミュージックを表現。僕もソプラノ、アルト以外に、今回はテナー、バリトンも演奏、前作「モダン」と同様シンセ、ピアノ類も操ってシンセ・ベース、パーカッションまで担当しているの、ほとんどが青山さんと僕のデュオ形式でできあがったアルバムということになる。

そして、レコーディングも終わった今、次はいかなる「サキソフォンミュージック」を追求しようかと、目下、思案中の毎日であります。

【本多俊之】

本多俊之プロフィール

1957年4月9日、東京生まれ。

ジャズ評論家、本多俊夫氏の長男。幼稚園から高校までピアノ、フルート、サクソス、更にアレンジメントの英才教育を受けた。以来、高校在学中から成蹊大学卒業後まで、ジョージ大塚コンボ、古澤良治郎、そして自己のグループ等で活動を続ける。'78年、L.A.の人気グループ、シーウィンドをバックに従えて、初のリーダー・アルバム「バーニング・ウェーブ」を発表。'79年、セルジオ・メンデスandブラジル'88と共に2作目のアルバム「オバ!コン・デウス」を発表、2年連続して「アドリブ」誌の「日本のクロスオーバー」部門ベスト・レコードに選定され、驚異的な記録を残した。

曲目について

SIDE 1

ドリーム・カム・トゥルー

DREAM COMES TRUE

本多のオリジナル、「ドリーム」制作に当り、大きな希望と期待、更にチックに対する憧れ、数えあげればきりがないほどの夢が詰まっている作品。チックにもその心が充分に通じている。真にこのアルバムのトップにふさわしい。

オド・トゥ・シゲータ

ODE TO SIDDHARTHA

チック自身のオリジナル。東洋に大変ぞうけいが深く、その中でも仏教については非常な興味を示し、この作品が出来上がった。タイトルのシゲータは釈尊が太子であった時の名。

悉達多（しつたるた）の詩、釈迦修業の時の問いかけが、チックと本多の語りかけで表現されている。

SIDE 2

モダン

MODERN

「ザ・プロジェクト4」一人一人の録音をオーバー・ダビングした本多のコンダクター作品。

各楽器イクスプロージョン音の結合が集約され音楽になった、それが本多の世界、いわゆるモダンである。

イブニング・グローリー

EVENING GLORY (GOING HOME)

この作品もすべて楽器一つ一つがオーバー・ダビング。ジャンルを超越したマゾヒズム、リスナーは感性をためされそうな音の結合、本多の音楽には理由をつけられない。

天才は自らを問いつめた!



チェック・レコードのきき方

このところジャズ界は、かつてのような活況を呈している。ジャズの名門ブルーノート・レーベルも復活し、国の内外を問わず実力ある若手が続々と現われているのである。

本アルバムの本多俊之は、デビュー以来、我国を代表する若手のホープとして期待を集めていたが、とりわけ'84年度の活躍には目を見張るものがある。本多俊之も他の若手アーティスト同様フュージョン・ミュージックによって人気を高めたが、一方ではライブ・スポットやレコーディングなどで多くのアーティストと共演し、実力を高めてきたといえるだろう。そうした、多彩な音楽体験が彼の音楽を単に聴きやすいだけの軟弱なフュージョン・ミュージックとは一味違うものにしたといえる。そんな彼の実力が一気に花開いたのが、本作に収められている「ドリーム」と「モダン」という二枚のアルバムといえるだろう。

「ドリーム」は、'84年度スイング・ジャーナル誌ジャズディスク大賞の「制作企画賞」を受賞した作品である。

本作は、本多俊之がチック・コリア(p)、ミロスラフ・ビトウス(b)、ロイ・ヘインズ(ds)のトリオと共演した、文字通り夢のようなアルバムである。コリア～ビトウス～ヘインズというトリオは、'60年代後半に「ナウ・ヒー・シングス、ナウ・ヒー・ソブス」というアルバムを発表しているが、そこでは、コリアの軽やかで鋭敏なタッチのピアノにビトウスとヘインズが絡む絶妙のコラボレーションを展開していた。本作は、その三位一体の世界に若手の本多が切り込み、ベテラン・アーティストと堂々と渡り合っているという印象を受けた。中でも、このアルバムに収められた「ドリーム・カム・トゥルー」と「オド・トウ・シダータ」は本多の即興演奏家としての高い実力を知ることができるクリエイティブなソロが聴けるのである。

「モダン」は、昨年8月に発表された本多の最新作で、そのタイトル通り斬新で超モダンなサウンドが聴け、彼自身が自由自在に音を創り上げたという印象を受ける。レコーディングに際しては、まず古澤良治郎のドラムスを録り、それを聴きながらメロディを作り、その後後藤次利にベースを自由に弾かせ本多がシンセサイザーをかぶせたという。一般にこうしたエレクトリック楽器を多用した作品では、リズム・マシンを使ったりほとんどのパートを機械に頼ってしまう場合が多い。ところが、このアルバムは全て生身の人間が行っているのである。それによってエレクトリック・ミュージックにありがちな無機質な響きとならず、また、単なるギミックに陥ることを防いでいるといえるだろう。生きの良い低音のビートが本作の要めといえるが、定形的なパターンを排した自由な発想によるメロディやアドリブも特に強く印象に残る。

☆ドリーム・カム・トゥルー

チック・コリアとのレコーディングの夢が叶ったことを表現した本多のオリジナル曲である。トリオの描き出す緊張感に満ちた音楽空間を本多のアルトが奔放に駆け巡るという印象を受ける。

やや低めで十分な量感を含んだキックドラム、アグレッシブなシンバルワークやスネアの連打が聴きものだ。また、力強いビトウスのベース、繊細で鋭利なタッチのコリアのピアノ、良く唱う艶やかな本多のアルトなど全体のバランスの整った好録音といえるだろう。

☆オド・トウ・シダータ

'70年代初頭のコリアの実験的グループ「サークル」を思い起こさせるプログレッシブな作風である。4者が互いに刺激し合い覇気のある真剣勝負のようなプレイが聴ける。パルシブな要素が多いだけに、再生装置のダンピング・ファクター一聴瞭然である。ハイエンドにピークがあると、刺激的でナーバスな響きとなるが、バランスのとれたサウンドであれば、各アーティストの熱気やパッションがヴィビッドに伝わってくる。

☆モダン

活気のあるビートが強調された軽快な曲。シンプルなメロディが繰り返し現われるが、単調さを感じないのはリズムが生きているからに他ならない。重量感のある低音のリズムと軽妙なソプラノ・サクソの対比が面白い。オリジナル盤と比べると低音のビートがさらに力強く、音像のエネルギーも満点だ。また、パーカッション類の粒立ちの良さ、シンセサイザーの浮遊感も申し分ない。

☆イヴニング・グローリー

後藤の切れ味の鋭い重量感のあるEベース、リズム・マシンの感覚的古澤のドラミング、オリエンタル調のメロディが印象的だ。アンプのドライブ能力、スピーカーの低域のリニアリティのチェックにうってつけのソースといえるだろう。Eベースの音像が太く、しっかりと再生されブーミングが強調されなければ問題は無いといえる。

(小林 貢)



レコーディング・シート

CLIENT: DAM	DATE:
PRODUCER: Mr. Honda	REEL NO.:
DIRECTOR:	TAPE SPEED: 30, 15 ips
ARRANGER:	NOISE REDUCTION:
ENGINEER: Mr. Watanabe	REF: 250 0 Wb. m
OPERATOR: Mr. Usui	TONES: kHz: Hz: YU

TOSHIBA EMI
STUDIO
2-2-17 AKASAKA MINATO-KU TOKYO
TEL. 03-387-9188-9

M	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
DREAM COMES TRUE				H.H Kick ← Toms →	← Top →	SPr	W.Bass	W.Bass	W.Bass	W.Bass		
TIME	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
TAKE				← APf →	← APf →		ASAX	S.SAX				
NOTE												

M	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ODE TO SIDDHARTHA												
TIME	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
TAKE												
NOTE												

(デジタル)

SIDE 1-1 DREAM COMES TRUE (T. Honda)
SIDE 1-2 ODE TO SIDDHARTHA (C. Corea)

プロデュース : 梶原浩史、本多俊之、チック・コリア
エンジニア : 渡部喜久
アシスタント : 薄井文介
レコーディング : 東芝EMI第3スタジオ S.58-8-9.10
トラックダウン : タンカン・アルビリッチ
渡部喜久、チック・コリア
東芝EMI TDルーム S.58-12-8

マイク・アレンジ

W.Bass Neumann M-269c × 2 LINE × 2
Drs. H. H. AKG C-451
Kick E. Voice RE-20
Snare Shure SM-57
Tom's Kit ... Neumann U-89i
Top's Kit ... Neumann M-269c
Apf AKG THE TUBE × 2. Neumann SM-69
AS. SS. Neumann M-269c

CLIENT: DAM	DATE:
PRODUCER: Mr. Honda	REEL NO.:
DIRECTOR:	TAPE SPEED: 30, 15 ips
ARRANGER:	NOISE REDUCTION: Dolby A
ENGINEER: Mr. Sakamoto	REF: AES 250 0 Wb. m
OPERATOR: Mr. Shimizuno	TONES: 1K, 10kHz: 100 Hz: 0 YU

TOSHIBA EMI
STUDIO
2-2-17 AKASAKA MINATO-KU TOKYO
TEL. 03-387-9188-9

M	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
MODERN				H.H Kick ← Toms Kit →	SN	Drs Kit	← Top's kit →	← Pro-5 →	Drs Kit	S.SAX		
TIME	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
TAKE				F. Tom Bass	SAX	SAX	← E.G →	← DX-7 →	← EMU →		SMPTE	
NOTE												

M	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
EVENING GLORY				E.BASS	E.BASS	E.BASS	S.SAX	S.SAX	EMU	← SYNTH →	← SYNTH →	← SYNTH →
TIME	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
TAKE				H.H Kick	← Toms kit →	SN	F. Tom	← Top's kit →	← Drs off →	E.G	SMPTE	
NOTE												

(76 cm/sec. 24ch)

SIDE 2-1 MODERN (T. Honda)
SIDE 2-2 EVENING GLORY (T. Honda)

プロデュース : 梶原浩史、本多俊之
エンジニア : 坂元達也、富岡 豊
アシスタント : 清水野征也
レコーディング : 東芝EMI第2スタジオ
SEDC Cスタジオ
六本木ソニースタジオA&B
S.59-4-3.27
トラックダウン : 東芝EMI TDルーム S.60-4-12

マイク・アレンジ

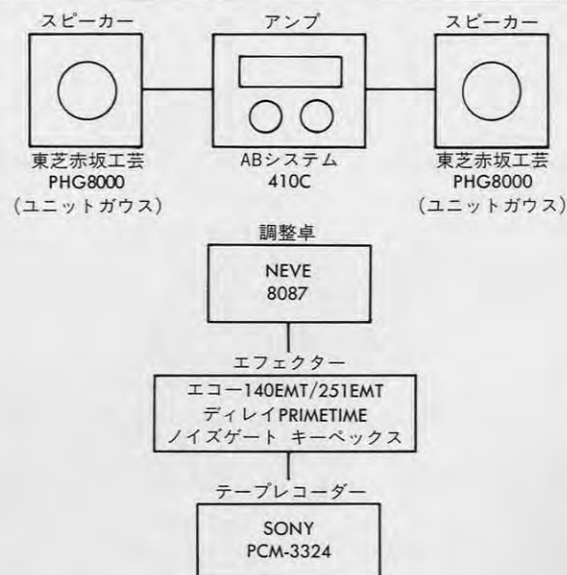
Bass LINE
Drs. H. H. AKG D-224
Kick Zenheizer MD-421
Snare " " "
Tom's kit ... " " " × 2
Top's kit ... AKG C-451 × 2
E. G. Neumann U-87
F. Tom " "
Sax " " × 2
Fl " "
Synth LINE
DX-7 LINE
Pro-5 LINE
OTHER LINE

本多俊之
alto sax, soprano sax
チック・コリア
piano
ミロスラフ・ビトウス
bass
ロイ・ヘインズ
drums

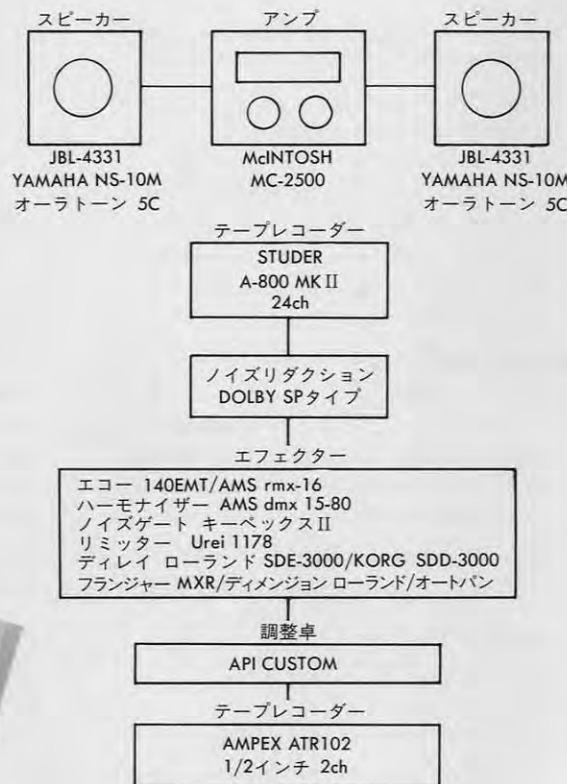
本多俊之
sax, flute, piano, keyboard,
percussion, wood wind
古澤良治郎
drums, voice
後藤次利
bass
和田アキラ
guitar
鳥山敬治
synth. program

ブロック・ダイアグラム

SIDE 1-1 DREAM COMES TRUE
SIDE 1-2 ODE TO SIDDHARTHA
(東芝EMI 3ST S.58. 8, 9, 10)



SIDE 2-1 MODERN
SIDE 2-2 EVENING GLORY
(東芝EMI TDルーム S.60. 4, 12)



● カッティング・データ

Cutting : TOSHIBA-EMI Cutting Room
Cutting Date : Apr. 22, 1985
Tape Recorder : SIDE 1-1,2(デジタル)
SONY BVU-200 PCM-1610
SIDE 2-1,2(アナログ)
AMPEX ATR-102 1/2インチ
Drive Amp : Neumann SAL-74
Cutting Lathe : Neumann VMS-80
Cutting Head : Neumann SX-74
Diamond Cutting Stylus
Non Limiter
Non Equalizer (SIDE 2-2を除く)

● スタッフ

プロデューサー : 本多俊之、小山正敏
サウンド・プロデューサー : 梶原浩史、渡部喜久
ディレクター : 菊地洋一郎、出口敏彦
ミキサー : 渡部喜久、坂元達也、富岡豊
サウンド・オペレーター : 清水野征也、薄井文介
カッティング・エンジニア : 竹内昭五
デザイン : 東芝EMI(株)デザイン室
録音場所 : SIDE 1-1,2 東芝EMI 3ST S.58-8-9,10
SIDE 2-1,2 東芝EMI 2ST, SEDIC CST,
六本木ソニー-ST A&B
S.59-4,3,27
トラックダウン : SIDE 1-1,2 東芝EMI TDルーム S.58-12-8
SIDE 2-1,2 東芝EMI TDルーム S.60-4-12

企画・制作 : 第一家庭電器DAM
製造 : 東芝EMI株式会社

DAM/ハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩で、ビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスク(C.D)の開発技術によって得られた製盤の技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスプロの仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て制作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時へタをすると針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによってはカートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

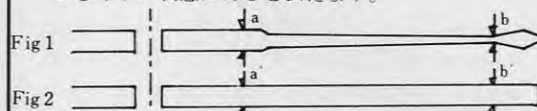


Fig 1 一般レコード a-b=0.6(mm)

Fig 2 新フラットレコード(ディスク) a'-b'=0.2(mm)

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比	最厚部 15%up 最薄部 65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調

査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ-280μ、(L-R)、ピーク・レベル+20dB程度のもは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形状を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと云えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みのある、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33%回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。
- (2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33%回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。
- (3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃-20℃位に保って下さい。
- (4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードです。特に1面2曲目は、ハイレベル・カッティングをした為カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質—プロユース材料使用